

# 広い入り口と多様な出会いを



はじめに

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が小学校国語科の学習指導要領に設けられてから十五年近い月日が経った。教材として採用された分、子どもたちと古典文学の出会いの機会は確実に増えたことだろう。この間、児童向けの古典文学関連書籍もいろいろと出されており、就学前後の子どもに向けた単発の絵本、シリーズ絵本から、児童書、そして子ども向け古典文学全集といったものまで、様々な種類の書籍を書店で手に取ることができる。新しく企画出版されたものだけでなく、再版あるいは増補改訂されたものもある。

とはいうものの、より幼い子どもが古典文学を楽しむには、いくつかのハードルがある。例えば古語。あるいはその作品が成立した時代の社会・風俗・価値観等についての知識。または、就学前後の子どもを主な読者と想定する場合には、作品の長さも課題になる。

原田 留美



古語ゆえの親しみにくさについては、多くの場合、現代語訳という方法が採られる。ただ、これは散文作品には有効な方法だが、古語の響きやリズムも重要な魅力の一つである韻文作品にはあまり向かない。より幼い子どもを対象としている古典文学関連書籍の原典の多くが散文作品であるのも、そのためだろう。

作品の長さについては、ページ数に限りのある絵本の体裁で出版する場合に特に問題となることだろう。詳しく調査をしたわけではないが、神話や中世説話などを取り上げた絵本が多く目に付くのは、作品の一部分を独立性の強いエピソードとして扱い易いという事情の反映かと思う。

右のような状況を踏まえつつ、近年の刊行点数が多く、かつ、筆者が長く関心を寄せてきた日本の神話関連の絵本・児童書、特に幼児から小学生向けのものを中心に、ここでは見ていくこととした。

なお、今回述べることの一部は以下の講演録でも取り上